|  |  |
| --- | --- |
| O-00 | **飼育下ベルーガにおける繁殖期の行動パターンと生殖腺活動との関係～６年間の観察【題目はメイリオ，太字，10.5ポイント】**  ○筆頭発表者氏名1，共同発表者氏名1，共同発表者氏名2，共同発表者氏名2，共同発表者氏名3（1岐阜大学応用生物科学部 動物繁殖，2〇〇〇水族館，3共同研究機関名）【メイリオ，10ポイント，発表者に○をつける】 |

・・・【ここは1行あける】・・・

【要旨本文はメイリオ，英数字も同様，10ポイント】鯨類も含め一般的に，発情に伴う性行動は生殖腺からのホルモン分泌によりその発現が支配されている。本研究では，飼育下の雌雄ベルーガ（*Delphinapterus leucas*）【←初出の動物名には学名を入れる】において，行動と性ステロイドホルモン動態との関連性を調査することで，繁殖期に見られる一連の行動パターンを，生殖腺活動の状況と比較して明らかにしようとした。名古屋港水族館の成熟雄1頭（Dl-001：ホドイ）と成熟雌2頭（Dl-005：グレイ，Dl-006：タアニャ）を対象に，2011～2016年の計6回の繁殖期とその前後の時期（3～7月）の行動を肉眼観察し解析した。性ステロイドホルモンは，雌の尿中エストロン-グルクロニド（E1G）【←略号を用いたい場合は初出にカッコ書き】とプロジェステロン（P4）濃度を酵素免疫測定法により測定した。また，雌の血中エストラジオール-17β（E2），P4および雄の血中テストステロン（T）濃度を民間検査機関で測定した。

雌では3～5 月に意識，腹見せおよび腹当て，雄ではこれらに加えペニス出し，雌雄間では並泳および腹合わせの各行動が顕著に増加した。また，雌のこれらの行動の増加時期は，雌の血中E2濃度および尿中E1G濃度の上昇動態と一致していた。すなわち，雌ベルーガの意識，並泳，腹見せおよび腹当て行動は，エストロジェン分泌に伴う発情関連行動であり，卵胞成長の動向を反映しているものと考えられた。一方，雄では行動量が顕著に増加した時期は，雌の発情期と一致したが，血中T濃度の上昇期とは異なっていた。雄の血中T濃度は前年9月から上昇し始め，2 月にピーク値を示し，その後4月に行動量が顕著に増加するという周年パターンが明らかになった。このことから，雄は繁殖期にむけて精巣活動が活発になり，その後雌の発情状態を捉えて諸行動を発現したものと考えられた。

・・・【ここは1行あける】・・・

【他学会等で報告済みの場合は必ず記載→】［2016年度勇魚会シンポジウム（2016）にて発表済み］

【要旨の文字数に制限は設けませんが，概ね1ページ以内もしくは2ページ以内に収まるように作成してください。】